

ゲーアハルト・ハウプトマン 「ノーベル賞の意義（1912年12月10日、ストックホルムのノーベル賞晩餐会で行われた講演）」

Gerhart Hauptmann, «Der Sinn des Nobelpreises. Rede, gehalten beim Nobelpreis-Bankett zu Stockholm am 10. Dezember 1912» (1912)

今年度のノーベル文学賞受賞者として、心のこもった暖かいお言葉を頂戴いたしましたことに感謝いたします。私ならびに私の祖国がこの荣誉を心からありがたく思っていることは申し上げるまでもありません。ノーベル賞授賞式が開かれる12月10日は、地球全体の文化を代表する日となりましたし、名高き創設者ノーベルは自らの名前を未来永劫に渡ってあらゆる国家の精神生活と結びつけました。疑うべくもない援助の力を備えたこの文化の守護聖人に対して、かつて人びとが感じたのと同じ感慨を抱きつつ、この先も、あらゆる地域の卓越した人びとが、ノーベルの名前を口にするようになるでしょう。その記念硬貨は、あらゆる民族の家族たちに代々受け継がれ、敬意を持たれ続けることでしょう。

この偉大な贈呈者に、今後とも変わらぬ敬意を捧げさせていただきたいと思います。そして同時に、この人物を生み、その博愛的な遺言を忠実に守っておられるスウェーデン国民の皆さんにも。また、良い芽を育て雑草を絶やすためにリュンケウスの鋭い目で世界の文明国を

見晴るかすという献身的な作業をなさっている方々のことにも、ここで触れさせていただきたい。皆様に感謝するとともに、あらゆる行いの中でももっとも祝福に満ちたこの賞を今後どうか絶やさず、真に豊かな成果を収穫し続けていかれることを望みます。

財団がその根本に抱く理想の実現がますます近づいていることを祝して、乾杯を捧げたいと思います。その理想とは、世界平和です。科学と芸術が究極において追い求めるのも、その夢です。真正かつ究極の芸術や学問とは、戦争に仕えるものではない。それは、平和が産み、平和を産むものなのです。それゆえ偉大かつ究極、そして純粋に理念的なこのノーベル賞に、乾杯を捧げます。文明国の社会において個人のあいだでは露骨な暴力はいまは禁じられていますが、同じように諸民族のあいだでも露骨な暴力が追放されたときこそ、人類はこの賞を、みずからに授けることでしょう。

（訳：本田雅也）

1) [訳注] 翻訳に際しては以下を底本とした。Gerhart Hauptmann *Sämtliche Werke, Band IV, Erzählungen Theoretische Prosa*, Propyläen Verlag, 1963, p. 703.